

# 日本食品工学会 20周年を迎えて その3 (最終回)

山 本 修 一



日本食品工学会は2000年8月に設立され、本年で20年となります。

第2号から開始した20周年記念特集も今回、第4号の“その3”が最終回となりました。今回は、20周年から30周年を目指した多くの提言がなされているのが特徴です。

はじめに、10周年記念事業を担当された中西一弘元会長は、「日本食品工学会のこれまでとこれからの10年への期待」という題目で、10周年当時の本学会の状況の説明と、その後の10年について総括されています。そして、今後10年の課題について日本国内の人口動態に基き、主として教育・人材育成に関してたいへん貴重な提言をされています。

本学会は設立当初から、産業界と学界の積極的な共同活動を重視しており、その目的のためインダストリー委員会が設置されていることは、ご承知と思います。その20年の活動を設立時から関与されてきた稲熊会長が、“日本の食品モノづくり”という観点でまとめ、学会の将来についての提言でしめくくっています。

学会の将来構想については、10年後(2030年)を念頭に置いたFood Engineering 2030というプロジェクトが立ち上がっています。今回は、プロジェクトの目的と現在の活動状況について、本会設立時の目的、学問領域、対象範囲に基づいた議論の一部を紹介しています。最終提言は次回、2021年第1号に掲載予定です。

人材育成も本学会の重要な使命であり、インダストリー委員会が中心となり、さまざまな活動をしてきました。既に、食品工学講習会については、2号で報告しています。今回は、新しく開始した活動(専門フードスペシャリスト資格、インターンシップ)について紹介しています。

アカデミアにとって“食品工学”をどう考えるか、どう定義するかは重要です。2名のアカデミアからの副会長に、それぞれの分野(「食品熱操作」および「食品の物性と水」)での総説(解説)をまとめてもらいました。(「食品の物性と水」については、論文集のほうに掲載されています)。

会員には、すこしわかりにくい国際交流について20年間の活動と今後についてまとめています。本学会設立には、国内で開催された食品工学の国際会議が大きな役割を果たしたことは、複数の元会長が述べておられます。食品工学の最新技術を世界に発信するとともに、安全性等では世界標準が常に改訂されていくので、それらの情報更新も重要です。

最後に、一般社団法人に移行してからの学会運営状況について、会員数や通常会計の推移を含めてまとめています。

20周年特集記事の著者によるシンポジウムも来年に企画されています。また、3回にわたった20周年特集をホームページ上でバーチャル特集号として閲覧・ダウンロードできるようにする予定です(10周年記念特集号についても、同様に設定します)。

ホームページ自体も、会員がより多くの情報にアクセスできるようにアップグレードします。

(山口大学 山本修一)